

<書評論文>

ルーマン理論と現象学

Niklas Luhmann,
Die neuzeitlichen Wissenschaften und die Phänomenologie.
 (Wien: Picus Verlag, 1996)

金子 雅 礼

はじめに

本書は1996年にウィーンにおいて行われた講演をもとにして書かれている。この講演でニクラス・ルーマンは、ちょうどその60年前に同様にウィーンで行われたエドムンド・フッサールの講演を振り返りながら、フッサールの現象学と社会システム理論との関係について論じた。

そもそもルーマンは、70年代にユルゲン・ハーバーマスとの論争で知られたが、当時からフッサール現象学に影響を受けており、その論争以降、「意味」概念が社会学の基礎概念であることを一貫して主張した⁽¹⁾。ところがルーマン自身が自らの立場とフッサールとの関係について主題的に論じた文献は、筆者が知る限りほとんどなく⁽²⁾、本書は両者の関係が積極的に明らかにされているという点で興味深い。

本書は8つの章から構成されている。まずⅠ、Ⅱ、Ⅲ章において、ルーマンはフッサール哲学と近代社会との関係を論じていく。その中でルーマンは、従来の哲学や社会学がフッサールの見解に注意を払ってこなかったということを示唆しつつ、その一方でフッサール哲学がもはや時代遅れになったことを指摘する。そして続くⅣ章では、フッサールのノエシスとノエマという超越論的な区別を、自己言及と他者言及という経験的な区別に置きかえるべきであるという主張がなされる。さらにⅤ章では、自ら「ラディカル構成主義

⁽¹⁾ Luhmann[1971=1985:29]を参照せよ。

⁽²⁾ 比較的明確に述べられているものとしては以下のものがある。Luhmann [1984=1995:494].

radikaler Konstruktivismus」と呼ぶ、ルーマン理論の認識論的枠組みが描かれる。そしてそれらの分析をふまえて、Ⅵ章とⅦ章では、ルーマンは超越論的現象学の立場を放棄し、経験的なシステム理論へと本格的に移行する。最後にⅧ章では、ルーマンは本書で述べてきた自らの分析を振り返り、経験的なシステム理論にとっては、「批判」ではなく、「描写の描写」こそが重要であると主張する。

本稿では、続く1節でⅠ、Ⅱ、Ⅲ章について解説し、ルーマンの問題意識を確認する。そして順に節を設け、それ以降のルーマンの主張を明確にしていく。

1 フッサール哲学と近代

フッサールの講演が行われた1935年という時代は、ファシズムが領土を広げつつあった時代であり、この講演で述べられたフッサールの思想は、そのような圧力に対して、いかにしてヨーロッパ的なものを守り抜くかという課題への一つの回答であった。このような思想は時代背景を考慮してみる場合、ルーマンも他の著作で指摘しているように正当なものであったと言えるだろう。⁽³⁾

しかし第二次世界大戦、特に冷戦以降、経済構造はヨーロッパに限らず、世界レベルで大きく変化した。また同時にエコロジカルな問題も浮上してきており、もはや問題はフッサールが描いていたものと異なってきたとルーマンは主張する。

ルーマンによればフッサール哲学の特徴は大きく4つに分けられる。①まず最も際立っているのが、今日ほとんど見かけられないほどのヨーロッパ中心主義である。ヨーロッパは確かに危機に瀕しているが、それは誤った合理主義のせいであり、そのような危機はヨーロッパの自己批判的な理性によって救済へと導くことができるとフッサールは考えていた。②またフッサールは文化形象としての哲学の特殊性を強調した。フッサールにとって哲学は理念的な真理を追究するものであり、他の文化形象とは異なる性質のものであった。③そして、フッサールは精神科学／自然科学を厳密に区別した。ルーマンによれば、区別の一方向の面は、その形式全体を支配するという。たとえば法律家にとって合法／不法という区別がそれ自体、合法であるとみなされるように、フッサールにとって精神科学／自然科学という区別は、精神科学によって支配された非対称的な区別である。したがって精神科学のみが「いかなる精神の下で自然科学は研究に従事しているか」という問いを立てることができるのである。④最後にフッサールは、歴史的に構築された様々な先入観、つま

⁽³⁾ Luhmann[1992=2003:182]を参照せよ。

り伝統を一切受け入れない姿勢を示していた。それは理念的な真理に到達するために必要な理論的態度の一種である。

以上4つのいずれにも共通して言えることは、フッサールは自らの理論の根拠を超越論的＝外部的基準に求めたということであろう。しかしルーマンの見解によれば、近代社会という脱中心的な社会においては、それぞれの部分システムは自らの根拠を外部に求めることはできず、それを自ら調達しなければならない。それゆえルーマンは超越論的現象学の立場を放棄し、経験的な自己準拠システムの理論を提唱するのである。

2 意識と時間

前節で示唆しておいたように、フッサールは自らの理論を超越論的主観によって根拠付けた。そうしたフッサールの主要な関心は、意識のオペレーションの基礎構造を説明することであった。IV章においてルーマンはフッサールの概念を自らの概念と比較検討する。

フッサールは、意識がそこにおいてオペレーションを生み出しているような形式を「志向Intention」として示した。そしてルーマンは、このような志向の性格をまさに差異を設けることに他ならないと考える。

「志向とは、何か規定されたものを（そして他ではないものを）指示したり、思考したり、意図したりするように意識を動機付けるような、差異の設置、区別の集合にすぎない。」(Luhmann[1996:31])

またルーマンによれば、このことはスペンサー・ブラウンの指示の算法と適合的である。それに従えば、意識の最初の不可避的な命令は、「区別せよ」であり、意識の形式においてそれは、意識の自己再生産における固有の働きなのである。

ところでフッサールにとって「世界」とは規定性と未規定性の総体であった。しかしルーマンによれば、そのような世界概念を用いるとき、未規定性を規定可能性として扱うことに伴うリスクをいかにして埋め合わせることができるか、という問題が生じてくるという。フッサールにとってその問題は、すべての経験的な証明から独立した、自己反省の基礎として導入されている「ノエシス」と「ノエマ」という二重構造によってすでに解決されたものとして扱われてしまっていた。それに対してルーマンはノエシスとノエマという区別を、「自己言及」と「他者言及」という経験的な区別に置き換えることを提案する。そうすることでルーマンは、システムと環境との間の複雑性の落差をより動的に問題と

することを可能したのである。

ところでこれら二つの言及は互いに条件付けあっている。意識はそれがそれ以外の何物かと区別することができなければ、自らを指示することはできない。したがって志向を通じて継続する意識のオペレーションは、自己言及と他者言及の区別を基礎としてのみ可能なのである。そしてルーマンは、自己言及と他者言及の間の絶え間ない振動が、時間と関連していることを指摘する。なぜなら自己言及と他者言及という区別は、それらが形式の両面であるがために同時に双方を指し示すことができず時間を必要としているからである。その際、過去や未来はもはや実際のなものとしてではなく、地平として再構築される。そして現在はその過去と未来の間の交差点としてのみ成立するのである。つまり過去と未来は、実際に生起した事実の連鎖として考えられるのではなく、現在を起点として構成されるものとして扱われるのである。

ルーマンによれば、フッサールにおいても時間は重要な位置を有していた。しかしフッサールは時間を、流れや運動といったメタファーによって捉えようとしてしまった。そうして理性によって進歩するものとしてヨーロッパの歴史を直線的に捉えてしまったところにフッサールの誤りがあったとルーマンは考える。

3 認識とリアリティ

前節で見たとおり、ルーマンはフッサールと異なり、自己言及と他者言及という区別を導入した。そうすることによって、経験的な認識論にも新たな可能性が切り開かれることになる。V章において、その新たな認識論への展望が示される。

ルーマンによれば、一般的に認識能力を持ったシステムは、自己言及と他者言及という区別を用いてオペレーションを行っているのだが、そのようなシステムは他者言及においてのみ、その環境に到達できる。しかしそれは表象としてのみ可能であり、操作的にはシステムは環境に関連することができない。

そもそも近代社会は多中心的な社会であり、絶対的なコードをそこに示すことはできない。近代社会におけるシステムは、それがいかなる観点から世界や自分自身を描写しているかに応じて、様々なコード、フレーム、主導的な区別を用いているのである。それゆえシステムによって見えるものは異なるのであり、リアリティという概念も新たに再構成されなければならない。ルーマンは、ラディカル構成主義の名の下に、そうした新たなリアリティ概念を定式化したのである。

「ラディカル構成主義は、正確にそのことを受け入れることができる。なぜならばその場合、リアリティは自己言及と他者言及の（あるいは主体と客体との、意識と現象との）自己言及的統一性というパラドックスの相関概念に他ならないからである。それは同時に、リアリティそのものに留まることはできないということでもある。それはパラドックスと同様に『展開』へと向かうように指示されている。それはある構成から他の構成へと至るための補助手段にすぎない。パラドックスとして与えられたリアリティは、無条件に与えられており、システム内で条件付けることのできない、それゆえに不毛なままである、唯一の知である。」(Luhmann[1996:45])

そもそも他者言及とはある意味で一つのパラドックスである。なぜならその言及された他者は、自己が生み出したものだからである。そしてそこに自己言及と他者言及は自己言及的な統一性であるというパラドックスが生じる。そしてそのような自己言及と他者言及という操作を行うためにシステムが用いている主導的区別において処理しきれないような第三項がシステムの内部に入り込むとき、システムの均質性は破られる。そのようにシステム内部において処理できないものとして絶えず与えられる、言わば「他者の他者性」こそがリアリティである。

そのように考えてみると、絶えざる自己批判によって到達可能な究極的なテロスといったものはもはや存在しないということがわかる。可能なことはある構成を他の構成へと置き換えることだけである。したがって自己批判的な理性とは、フッサールが考えたような理性ではなく、むしろそれは皮肉なことに、彼が締め出そうとした「ヨーロッパ中をさまよい歩くジプシー」(Luhmann[1996:46])の理性なのである。

4 超越論的現象学からシステム理論へ

ルーマンは、超越論的な反省の基礎を与えるようなノエシスとノエマという区別を、自己言及と他者言及という経験的な区別に置き換えた。したがってそれによってすでに暗示されているように、超越論的主体という概念はもはや不要のものとなったのである。Ⅵ、Ⅶ章において、現象学をシステム理論へと拡張する試みがなされる。

前述したように、早い時期からルーマンは、意味概念を基礎に据えたシステム理論の構築を目指していた。そのさい超越論的主体によって意味を定義するのではなく、むしろ意味によって主体を定義することが提唱されていた。ルーマンは意味概念それ自体を取り出してくることによって、それを社会システムの記述のために拡張したの

である。⁽⁴⁾

フッサールにとって意識とは、それ以上、何ものにも差し戻すことのできない世界の基底であった。それゆえ意識は、自らによって自らを支えるという独特の性質を持つものであると考えられていた。それに対して、ルーマンは、そのような性質、つまり自己準拠という性質を持つものは意識に限られないと主張する。ルーマンにとって社会システムもまたそのような自己準拠という性質を持つものなのである。⁽⁵⁾

社会システムも自己準拠システムである以上、意識は世界の基底であるというその特権的な性格を失うことになり、意識を「超越論的なもの」として特性化する必要はなくなるとルーマンは述べる。そこで新たに心理システムと社会システムに共通のメディアとして意味概念が定義されることになり、その意味を用いた操作が、意識を用いて行われるか、コミュニケーションを用いて行われるかによってその二つのシステムが区別される。

1節で示唆しておいたとおり、ルーマンは超越論的基礎付けから決別している。ルーマンの提唱する経験的な自己準拠システムの理論は、そうした主体といったような外部基準によってではなく、システムの内的な作動によってのみ自らを支えるシステムの理論なのである。

5 再描写の理論

ルーマンによれば、このようなフッサール解釈は、批判ではないし、哲学でもない。ここでルーマンは、フッサールの理論を一つのコミュニケーションとして読むことを薦める。そうしたルーマンの態度は、Ⅷ章において、描写の描写として問題とされる。

ルーマンにとって描写の描写とは、「必然性の偶発性への、あるいは知識や行為の自然な枠組み条件の人工的な枠組み条件への変形」(Luhmann[1996:57])である。そしてこのような再描写の理論は、フッサールとは全く異なったかたちで時間と関連しているとルーマンは言う。そもそもフッサールはヨーロッパ的な理性の歴史とヨーロッパ科学の危機の関係というものを明らかにしようと試みた。その際、時間は、前述したように、流れとして、運動として、過程として捉えられていた。それに対して再描写の理論は、「描写された描写をその過去として、その固有の概念の更なる新描写への見通しをその未来として視野に

⁽⁴⁾ 意味概念について、ここで詳細に述べている余裕はない。2節での議論を参考にして欲しい。

⁽⁵⁾ どうして社会システムも自己準拠システムとして描くことができるのか？それについては、Luhmann[1984=1993:164]、あるいは馬場[2002a:66]を参照せよ。

納める。それは現在を過去と未来の差異として理解する。それは自らの位置をもはや時間の中でのみ表現するのではなく、時間の助けを借りて表現するのである。」(Luhmann[1996:59])したがってルーマンにとって時間とは、観察の規定された形式にすぎないである。

こうして時間を観察図式とみなすことによって、フッサールの目的論的な時間概念から逃れることが可能になった。ルーマンはある単一の究極的テロスに向かって突き進むような超越論的歴史の存在を認めず、歴史そして時間を、その都度システムによって構成されるものとみなす。ここでもルーマンが超越論的根拠付けを放棄し、経験的なシステム理論へと移行していることがわかるであろう。

終わりに

以上、我々はルーマンの言及に沿って、フッサールとルーマンの相違について明らかにしてきた。しかしルーマンの行ったような転換によって、何が変わったというのだろうか？最後に我々は、ルーマンが語らなかったことまでも明らかにする必要がある。

すでに述べたように、フッサールは絶えざる自己批判によって哲学は普遍的な認識たり得るということを主張した。しかしそれはヨーロッパ的な理性の概念に捕らわれており、そのような考えをもはや受け入れることはできない。

そうしたフッサールの見解に対して、ルーマン理論の研究者である馬場靖雄は社会学の課題を「喜劇的批判」に求める⁽⁶⁾。その喜劇性とは、描写の描写が、あるいはコミュニケーションが環境のリアリティに接触することにより、絶えず失敗することのうちにある。しかしその失敗は同時に新たなコミュニケーションを生み出す契機でもある。そうして失敗を受け入れ、コミュニケーションに新たなコミュニケーションを接続させ続けることのうちにその喜劇的批判の内実がある。

こうした馬場の主張を踏まえてみるならば、本書で述べられたルーマンの思考、あるいはルーマンの理論全体もまた新たな観察にさらされることになり、失敗する。ルーマン以後、我々が行うべき課題はそのようなルーマン理論の再描写なのである。

従って、われわれもまたルーマン理論の再描写を試みなければならない。フッサールの課題とは、認識論的な問題を超越論的主観によっていかに克服するかであった。それに対してルーマンの課題は、認識論的な問題をずらすことにあったと考えることができる。そ

⁽⁶⁾ 詳しくは、馬場[2001a:167]を参照せよ。

もそもルーマンは認識論的な問題に取り組んではおらず、システムが実在するというテーゼから出発するルーマンの理論は一見すると認識論的に素朴すぎるように思われるかもしれない。しかしシステムが実在するというドグマティックな前提から出発することで、ルーマンは、逆説的に自らの理論を相対化することを可能にしたのである。なぜなら理論と対象の関係もまた、システムと環境の关系到他ならないからである。ルーマンは自己反省を、つまり観察の観察を、セカンド・オーダーのサイバネティクスとして、自らの理論にも適用したのである。

フッサールは認識論的な問いを掲げ、哲学の領域にとどまった。それに対して、ルーマンは認識論的な問題をも観察の対象と見なすことによって社会学の領域へと進んだ。我々もまたそのようなルーマンの業績を引き継がねばなるまい。

参考文献

- 馬場靖雄、2001a, 『ルーマンの社会理論』勁草書房。
 ———、2001b, 「構成と現実／構成という現実」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版、43-57。
 Habermas, J. & Luhmann, N. 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1985, 佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎訳『ハバースマス・ルーマン論争——批判理論と社会システム理論』木鐸社。)
 Luhmann, N. 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1993, 1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論 (上) (下)』恒星社厚生閣。)
 ———. 1992, *Beobachtungen der Moderne*, Opladen, Westdeutscher Verlag. (=2003, 馬場靖雄訳『近代の観察』法政大学出版局。)
 Husserl, E. 1954, "Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie," *Husserliana*, Bd. VI, Den Haag. (=1974, 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社。)
 ———. 1954, "Die Krisis des europäischen Menschentums und die Philosophie," *Husserliana*, Bd. VI, Den Haag, 314-348. (=1999, 「ヨーロッパ的人間性の危機と哲学」清水多吉・手川誠士郎編訳『30年代の危機と哲学』平凡社, 21-99。)

(かねこ まさゆき・修士課程)